

ひとつの火

わたしが子どもだったじぶん、わたしの家は、山のふもとの小さな村にありました。わたしの家では、ちようちんやろうそくを売っておりました。

ある晩のこと、ひとりのうしかいが、わたしの家でちようちんとうろうそくを買いました。

「ぼうや、すまないが、ろうそくに火をともしてくれ。」

と、うしかいがわたしにいいました。

わたしはまだマッチをすったことがありませんでした。

そこで、おっかなびつくり、マッチの棒のはしの方をもつてすりました。すると、棒のさきに青い火がとまりました。

わたしはその火をろうそくにうつしてやりました。

「や、ありがとう。」

といって、うしかいは、火のともったちようちんを牛のよこはらのところにつるして、いつてしまいました。

わたしはひとりになってから考えました。

——わたしのともしてやった火はどこまでゆくだろう。

あのうしかいは山の向こうの人だから、あの火も山をこえてゆくだろう。

山の中で、あのうしかいは、べつの村にゆくもうひとりの旅人にゆきあうかもしれない。

するとその旅人は、

「すみませんが、その火をちょっとかしてください。」

といって、うしかいの火をかりて、じぶんのちようちんにうつすだろう。

そしてこの旅人は、よっぴて山道があるいてゆくだろう。

すると、この旅人は、たいこやかねをもったおおぜいのひとびとにあうかもしれない。

その人たちは、

「わたしたちの村のひとりの子どもが、狐きつねにばかされて村にかえってきません。それでわたしたちはさがしているのです。すみませんが、ちよつとちようちんの火をかしてください。」

といって、旅人から火をかり、みんなのちようちんにつけるだろう。長いちようちんやまるいちようちんにつけるだろう。

そしてこの人たちは、かねやたいこをならして、やまや谷をさがしてゆくだろう。

わたしはいまでも、あのとき わたしがうしかいのちようちんにもしてやった火が、つきからつきへうつされて、どこかにもっているのではないか、とおもいます。

底本＊「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者＊新美南吉

出版社＊大日本図書

出版年＊1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用＊1999年3月25日第11刷発行

入力＊安城市中央図書館職員